

「もう」はどのようにフィラーになったか

—フィラー化の経路とフィラーの機能—

小出 慶一

【キーワード】

もう、フィラー、用法の拡張の過程

【要旨】

「もう」は、副詞、感動詞、フィラーという3つの側面を持つが、本稿では、副詞からフィラーへと性格を変えていく過程を検討した。「もう」の基本用法は、「ある事柄が、事態把握時点から見て、実現想定時点より早く実現したという認識を表す」というように「実現時」「事態把握時点」「実現想定時点」の3つの時点で捉えることができる。この用法がフィラーへとつながっていくわけであるが、その過程で2つのことが指摘できる。ひとつは、この3つのポイントが、時間から量、量から心理的な状態へと対象領域を広げることである。もう一つは、基本義にあった「ある基準を超える」という意味素性が、拡張の過程でも保持されていることである。こういう変化が可能になった背景には、「もう」が「あなたって人はもう」のような用法の「もう」が、対応するモダリティとの結びつきが緩むことによってかのようになったのではないかということ述べた。

1. はじめに

副詞から派生したと考えられるフィラーのひとつに「もう」がある。フィラーとしての使用頻度も高く、場面にもよるが、女性話者の場合「なんか」「あのー」に続いて3位の使用頻度があるという調査もある(Nagura1979)。本稿では、フィラー「もう」の派生過程、派生のメカニズム、発話の中でフィラー「もう」は何を表しているかを考えてみたい。

2. 「もう」の用法区分

副詞としての「もう」についてまとめた考察を加えているものとして、森田(1989)、渡辺(2001)がある。森田、渡辺で挙げられている例を参考に次のような用法区分を立てた。①～③は両者とも挙げているもの、④～⑥は渡辺が挙げているものである。

(1) 本稿での区分

- ①仕事はもう済んだ。
- ②もう来るだろう。
- ③もうだめだ。
- ④もう500万円あればなんとかなる。
- ⑤もう嬉しくてたまりませんでした。
- ⑥あなたって人はもう。

この6つの用法について以下に検討する。

3. 「もう」の意味

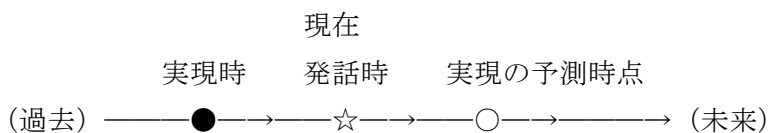
3-1 用法①（「仕事はもう済んだ」）

森田、渡辺が基本的な用法であると見ているのは、「仕事はもう済んだ」「宿題はもう済ませてしまった」というような用例である。ある事柄が発話時点ですでに実現しているということを表すものである。

この用法は、実際に起きた事柄を叙述するという具体性を持っている。また、「え、もう？」と問いかけたときの「もう」の意味は、「すでに、なにかが実現してしまったのか」という意味を表すことになると思われる。その点で、他の用法より無標性が高く、基本的な用法であると認めることができよう。

渡辺（2001）は、この用法について、次のように図式化して捉えている。●は事柄が実現した時点、☆が発話時、○が事態の実現が想定された時点である。記号などは変えているが、3つの時点の関係は元のままである。

(2) 渡辺（2001）



「もう」は、渡辺の言い方によれば、「事態Pの実現が予測以上に早い」（渡辺 2001 : 137）という話者の認識を表すものであり、図 i は、その間の3つの時点の関係を表している。

ただ、「発話時」という捉え方は、それが「発話時現在」を意味するならば、必ずしも正確ではないように思われる。次の例では、「もう」は、「発話時」の認識に関わるのではなく、そのコトガラを把握した時点での認識ではないかと思われるからである。「発話時点」は、「実現想定時点」の前後に現れることが可能である。

- (3) a. 昨日、教室に入ったときには、もう、みんな来ていた。
- b. 10年前、ここを通ったとき、もう、橋は完成していた。

過去の経験について「もう」が使われる場合に、「もう」の記述に必要なのは、次の3つの時点である。

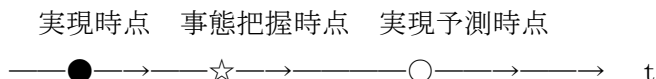
(4) 「もう」の記述に必要な時点

- A. 事柄が実現した時点
- B. 事柄が、実現想定時よりも前に実現したと認識した時点
- C. 実現が想定された時点（このCを「事態把握時点」と呼ぶことにする。）

この3つの時点は、 $A < B \leq C$ の順に並んでいる。発話時現在としての「発話時」は、B以降であれば、どこにも入りうる。そこで本稿では、「もう」の基本的な用法を、次のように捉えることにしたい。

(5) 「もう」の基本用法（用法①）

「もう」は、ある事柄が、事態把握時点から見て、実現想定時点より早く実現したという認識を表す。図中の「t」は「時間」を表わす。以下同様。



3-2 用法②（「もう来るだろう」）

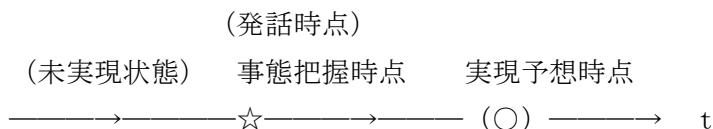
①が既実現の事柄を対象としていたのに対して、②は未実現の事柄が焦点になっている。用例は次のようなものである。

- (6) a. もう来るだろう。
- b. もう帰ってくるころだ。
- c. ??もう帰ってくるころだった

未実現の事柄が、近々成立するだろうという予測を述べるものである。この用法では、事態把握時点と発話時点が重なる。(6c)のような用法は不自然になる。②の「もう」は、発話時と事態把握時が重なり、発話時での判断を表す点が特徴である。その点が①と異なる。

(7) 用法②

「もう」は、事態把握時点（この場合は発話時）で未実現の事態の実現が近いという認識を示す。



3-3 用法③（「もうだめだ」）

用法①・②はコトガラ成立の時間的關係が焦点だったが、③は時間に伴う状態変化が焦点になっている。

- (8) a. もうだめだ。
 b. もうおなかがいっぱいだ。
 c. 足が痛くて、もう歩けなかった。

③の「もう」は、何らかの状態が過去のある時点で限界に達した、あるいは、限界に近づいており、それ以上その状態を維持することが困難であるという認識を表すものである。「もうX」のXには、限界に到達した状態を表す表現が来る。「終わりだ」、「だめだ」、「もう～できない」などである。

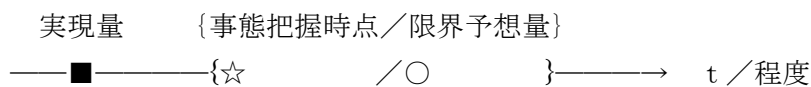
③では、時間の推移は背景に退いているが、「もう」のない表現（8b´）がある時点で捉えたコトガラを表すのに対し、「もう」のある表現（8b）には時間の推移のあることが見て取れる。その点で、③の用法も時間概念を含むものであることがわかる。

- (8) b. 足が痛くて、もう歩けなかった。
 b´ 足が痛くて、φ 歩けなかった。

また、③では、「限界と予想される状態」が「事態把握時点」と重なっているか、極めて近い未来にある。

(9) 用法③（「もうだめだ」の意味）

「もう」は、あるコトガラの量が、時間の推移に沿った事態把握時点から見て、すでに限界に達している、あるいは限界に近づいているという認識を表す。{ }は重なっていることを表す。



3-4 用法④（「もう 500 万円あればなんとかなる」）

この用法の特徴の一つは、名詞と結びつくということである¹。①～③の用法は、用言

¹ ただし、この用法の場合は、他の用法とアクセントが異なる。「もう少し」「もうちょっと」「もう一度」などは、一語化しているためか、「もう」のアクセントは「低高」となっている。そのアクセントは、一語性の低い「もう 30 人」「もう 500 円」などにも現れる。用法①から派生したと見ることもできるだろうが、別語意識がどこかに生じているのかもしれない。

と結びついたものであるために時間概念と結びついていたとも言えるが、④の「もう」では時間性は後退し、量概念が前面に出てきている。

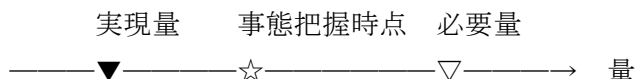
(10) もう 500 万円あれば、なんとかなる。

(11) もう 一人、必要だ。

「もう 500 万円」「もう一人」は、「必要量」との差を示すものであり、渡辺（2001）も指摘するように、3 つのポイント（下の図中の▼、☆、▽）の関係は、用法①と同じである。関係は同じであるが、時間軸が、実現量と必要量を示す軸に変換されたものとなっている。また、事柄の把握の仕方は、②と同じで、事態把握時点で実現されていない量に焦点を当てる形になっている。

(12) 用法④（「もう 500 万あればなんとかなる」の意味）

「もう」は、あるコトガラについて、現在の実現量に追加されるべき量を表す。すでに実現された量と実現予定量の差が「もう X」の X で示される。



3-5 用法⑤（「もう嬉しくて」）

この用法の例は次のようなものである。

(13) もう 嬉しくてたまりませんでした。

(14) このアイスクリーム、もう、最高。

⑤の「もう」は、心的な状態について、それが限界に向かい、後続の感情形容詞「嬉しい」「最高だ」が限界（想定実現度合い）を越えている、あるいは、限界に近いことを含意する。このコトガラの捉え方は、用法①と同じものである。

(15) 用法⑤（「もう嬉しくて」）

ある感情が、限界近くまで高揚した状態にあることを表す。



3-6 用法⑥（「あなたって人はもう」）

この用法は、副詞でなく、感動詞と見るのが妥当かもしれない。高橋（2005）によれ

ば、感動詞は、次のような特徴を持つものとされる。

- (16) a. 話し手の発話時現在の感情、情動、心情を表す。
- b. 文の他の要素から独立している。
- c. 1語で文となりうる。前後の文から独立している。
- d. 活用がない。

例を挙げれば次のようなものである。

- (17) あなたって人はもう。
- (18) もう、うそばっかり。

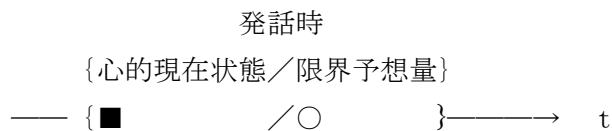
この例の「もう」は、単独で発せられても、それ独自の意図を相手へ伝えることができると思われる。(17)、(18)の「もう」は、相手への苛立ち、非難といった感情だろうが、「もう」と言うだけで、その感情を表現することはできると思われる。

「もう」は、怒り、苛立ちなどの否定的な感情を表すことが多いと思われるが、さらに、その感情が高揚し、頂点に近づいている、あるいは、達していることを示すものになっている。

⑤では、文内の述語などと結びついてその程度を表すものであったが、感動詞として⑥では、それ独自の感情価を持つようになっている。①～⑤のように、なんらかの事態の推移を事象として捉えて表現するものと異なり、「もう」は発話時における、感情の直截的表出であり、時間的な要素、事態把握という認識の仕方は含まれない。あえて図示すれば下のようなになる。

(19) 用法⑥

「もう」は、発話時に、話し手の感情が高揚し、限界状態に近づいていることを表出することば。苛立ちなど、対象に批判的な心的状態を表す。



4. フィラーとしての「もう」

4-1. フィラーとしての「もう」とは

次にフィラーの「もう」についてみてみたい。本稿では、フィラーを仮に次のように規定する。

(20) フィラーの規定

- a. 談話形成、行動形成のための心的活動に実時間的に連動して、無意識に発せられる音声。
 - 1. その音声は、その心的活動のあり方にしたがって形式を変える。
 - 2. その音声は、談話参加者を意識して発せられるものと、談話参加者に関係なく発せられるものがある。
 - 3. その音声は、通常、当該言語の音韻、語や句の範囲を越えない。
- b. 発話（文）、談話の構成要素とならない。
 - 1. 発話（文）の要素とならない。
 - 2. 単独で発話（文）相当の表現とならない。
 - 3. 談話構成、談話運用上の機能を持たない。

この規定からすると、「あの一、すみません」「えー、本日はよくおいでくださいました」の「あの一」「えー」のように、発話の切り出しという談話機能を持つものは、談話標識であってフィラーではないということになる。

4-2 フィラーとしての「もう」の性質

4-2-1 データ

この稿では、フィラーの用例は、「日本語会話データベース」（北九州大学上村研究室）から収集した。以下が、本稿でフィラーと考える「もう」の例である。

- (21) 2: あの一、中野区の、えー、上鷲宮という所なんです。
 - 1: あ一。(2: はい) じゃあ、中央線で。
 - 2: ええ。中央線の阿佐ヶ谷から、(1: うん) バスで、そうですねえ、(1: ああ一) 五分ぐらいですか。
 - 1: あ、(2: はい、ええ) そうですね、いや一もう、あの、ここはちょっと離れてますので、お時間がかかるんじゃないかと思って。(ITf)
- (22) 1: いやあの、日本人がよく働きすぎというのは(2: ええ) 言われてるんですけども、(2: ええ) このように、休暇もね、(2: ええ) もうせいぜい一週間とか、(2: あ、いえ) ええ、殆ど同じ時間、あの、にす、(2: ええ) あの一、日頃とか、(2: ええ、ええ) そのようなその、働きすぎ、(2: ええ) 働き振り、また、遊び方、に関して、どういう風に、(2: そう一ですね) 考えていらっしゃるんですか? ITf
- (23) 1: じゃ、保育園しだいという。
 - 2: そうですね(1: ああ)。あと今、学校ってあの、/学業だけじゃなくて(1: はい) あの精神的に子供の分を背負ってあげる事が(1: はい) 非常に重くって(1: はい) それがちょっとあの背負いきれないところが(1: うんうん) ありましてね(1: ああ、はい)。ええもうあの、家庭の中から救い出

せないていうか、おうちをなおせないていうかそこまで面倒を見るとちょっとしきれないので(1: うーん) 自分でもちょっとしきれないかな、ていうふうに感じていて。(1: あー) ええ。(K J f)

(24) 1: あのサッカーといえば、(2: はい。) 数年前にあの、Jリーグができて、(2: はい。) もうなんか、どうしたのかと思うぐらいの人気でしたけれども、(2: はい。) 最近は、やはり、ちょっと押されぎみっていうか、他のスポーツに、(2: うーん。) 昔ほどは、言われなくなっただけですけども、その辺ー、どうなんでしょうね。どういう風に。(K N m)

(25) 1: どうですか? (2: ええーあの一) 受験生のお母さんとしては。

2: 6月30日までもうクラブ筋でまいりましたので(1: はいはい) で水泳クラブに(1: ああーああ) 所属しております、したけれども6月30日の大会で一応引退いたしまして(1: ハハハ) であの/切り替えて(1: ええ) お勉強というあの一(1: ええ) 感じで。まだ一あの一本腰ではございません。(M T f)

(26) 1: ね、に、男性が8割、(2: はい) 女性が2割。(2: はい) はあ、そうですかー。女性は大変ですねー、じゃあ。

2: 大変ですねー、本当に、もう、なんでか分からないですけど、あの、(1: うん) 友人ーのまあ、女の子なんかも、もう何人かいいかげんに嫌気がさして、(1: うん) 就職活動自体をやめてしまった者も、いるので、(…)(M O f)

(27) (なぜ日本語教師をしているのかを問われて)

2: ははは。ええ、あの一ええ、は、学生時代に(1: うんうん) 私があの一フランス語のええ、クレディフという方式の(1: うんうん、ええ) あの一オーディビジュアルの(1: ええ、ええ) あれを受けましてもうカルチャーショックを受けて(1: うん) あのごく楽しかった、あーあの一記憶がありまして、その当時あの一日本語バージョンで(1: うん) 私の方はこれを、あの、国文科だったものですからやってみたらおもしろいと思ったんですが/ (…)(M A f)

4-2-2 フィラー「もう」の形式面での特徴

これらの「もう」の形式面での特徴として、次の点が指摘できる。

(28) フィラー「もう」の特徴

- a. 発話冒頭には現れない。
- b. 呼応する修飾先が特定できない。修飾先があるように見えることもあるが、明確な呼応はない。

では、このような「もう」は何を表しているのか。このことを考えるためには、どのように派生したかという派生経路、そして、どのような機能を持つに至ったかという意味の変遷、この2つを考える必要がある。

4-2-3 フィラー「もう」の派生経路

まず、派生経路について見てみる。

なお、「もう」の用法①～⑥を見直してみると、実現されたコトガラについて述べる「もう」と、未実現のコトガラについて述べる「もう」の2つのタイプのあることがわかる。

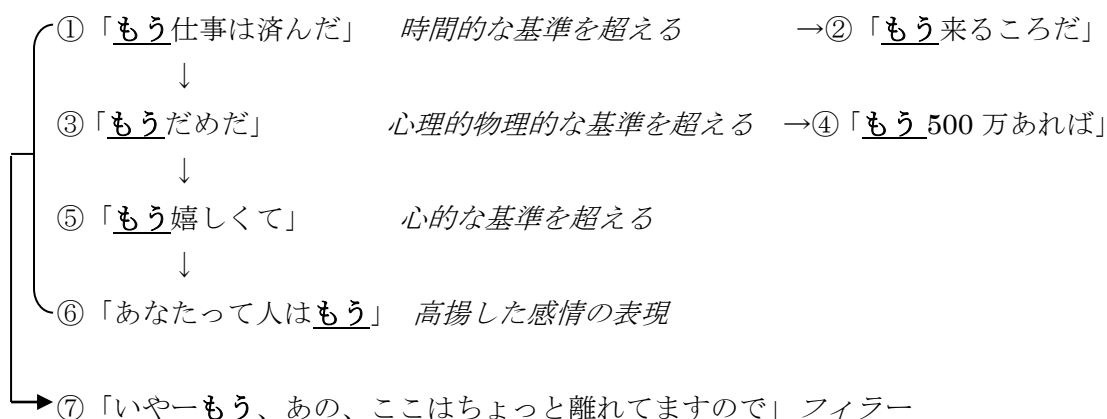
(29) 「もう」の用法のタイプ

A：既実現のコトガラについて述べるもの ①・③・⑤・⑥

B：未実現のコトガラについて述べるもの ②・④

この2つの系列のあることを含めて、派生経路を、仮に図示すると次のようになる。

(30) フィラー「もう」の派生



副詞用法は、「①時間→③物理量→⑤心理状態」と広がりつつ、その基準値あるいは限界を超えることを表すことで共通している。⑥感動詞は、そのような限界状態表示が内化したものである。

4-2-4 フィラー「もう」は何を表すか

フィラー「もう」が、どの用法から派生したかを特定することは困難であるが、少なくとも、副詞・感動詞用法から何を受け継いだか、それがどのように発話形成の中に現れているかの概略は述べるができると思われる。

フィラーとしての「もう」の機能面での特徴は、それが感情性を持つことである。なにかしらの気持ちの高揚の中で語られる発話に現れることが観察される。表現の面では、「もう」のあとには、感情性の高い表現が現れる。たとえば、「もうクラブ一筋で参りま

したので」(25)、「本当にもう、なんでか分からないんですけど」(26)「もうカルチャーショックを受けて」(27)のようなものである。「もう」は、これらのことが特筆すべきことだという発話姿勢に連動して現れている。それが、統語的な関係のつかみにくい形で現れるところに、フィラーとしての性格がある。

4-2-5 フィラー化の契機

またもうひとつは、特定の要素との結びつきがないという点である。「もう」がフィラー化していくメカニズムのひとつは、統語的な対応の弛緩化だと思われる。これは、「あの」や「まあ」など、他のフィラーについても観察されることであるが、対応の弛緩化とは、指示や呼応という2つの要素で構成される統語形態において、その1つ（通常は受け手側）が不明確になることによって起こる現象である。

「もう」は、副詞用法においては、①「もう済んだ」・③「もうだめだ」のように、「ある基準点を越えた事態」になった表現（「済んだ」「だめだ」）と対応していた。その対応が緩くなり、対応先が不明確になることで、フィラー化が進んだのではないかと思う。

5. おわりに

この稿では「もう」の用法の推移を見てきたが、もう少し抽象化して見直してみると、その用法の拡張は、語の意味のあり方を巧みに利用して行われていることがわかる。

「もう」の意味は次の要素からなっていた。

- a. 3つの時点の関係
- b. 意味領域

今仮に、ABCは時間概念を含んだもの、 $\alpha\beta$ は心的なもの、abcは量的概念に転換後のものとし、その表現の焦点部分を実線で、背景化された部分を点線で表わすとすると、次のように図式化できる。

(31) 「もう」の意味変化のパターン

- ① A—B—C
- ② A··B—C
- ③ A—B··
- ④ a··b—c
- ⑤ α — β ··
- ⑥ α/β

ここには、意味の可能性が詳細に分析され、利用されていることが見て取れる。

と同時に、基本的な用法(①)の枠の中で、意味的な推移が起こっていることが見て取れる。意味の広がりというものは、無制限に起こるのではなく、このように、一定の枠の中で起こるものだと思われる。

最後に、今後の問題であるが、「もう」「まあ」など、単純な音韻構造を持つものは、ヒトの叫びや唸り声から語彙化されていった可能性はないだろうか。ひらがなでは「うーん」と書かれるが、これも音声的には/m/である。この稿では、自立語がフィラー化するという仮定の上で議論したが、その逆の可能性はないのか、フィラー的なものから語彙化することはないのか、興味のある問題である。今後の課題としたい。

参考文献

森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店

渡辺実 (2001) 『さすが！日本語』 筑摩書房

Nagura, Toshie (1997) “Hesitations(discourse markers) in Japanese.” 『世界の日本語教育』 7, pp.201-218. 国際交流基金

追記

本稿は、小出 (2008) 『現代日本語における語の意味・用法の広がりに関する研究』 の第2部7章『もう』を大幅に修正改稿したものである。

(埼玉大学名誉教授)